二〇二二年度入学式 学長式辞

新入生のみなさん、ご入学おめでとうございます。御父母の皆様もお慶びのことと存じます。心よりお祝い申し上げます。本日、経済学部、経営学部、理工学部、文学部、法学部の五つの学部と、経済経営研究科、理工学研究科、文学研究科、法学政治学研究科の四つの研究科をすべて合計しておよそ一九〇〇名の新入生のみなさんを、ここにお迎えできたことは誠に喜ばしい限りです。

二年前から拡大し始めた新型コロナウイルス感染症のもと、これまで経験したことがないような生活様式、外出自粛などの辛く苦しい状況の中で、見事に合格をつかみ取られた新入生のみなさんの努力に心から敬意を表し、お祝いの言葉を述べたいと思います。

二十世紀の初頭、当時の画一的な教育に疑問を感じていた中村春二という青年教師が、成蹊園という名前の私塾を開きました。青年には今村繁三と岩崎小弥太という生涯の親友が二人おり、中村の志に対し、さまざまな局面において協力を惜しみませんでした。成蹊園から成蹊実務学校に、そして現在の成蹊学園、成蹊大学に至る道のりにおいて、一人の力だけでは大きな壁であったものを他者の支援を得ることにより乗り越えてきたということが、学園草創期に関わる記憶として本学には強く刻まれています。創立者の理念とともに学園のめぐった歴史というのは、学園のカラーを形作るものであり、成蹊学園、成蹊大学のなかの精神的なモニュメントとしてこの記憶は今でも大きく生き続けています。

さきに、合格をつかみ取られた新入生のみなさんの努力を称えました。それも様々な支えのあってのことと思います。また、これからの大学生活を送られるにあたって、様々な困難に出会われるかもしれません。独力で切り抜けられることもあれば、それがかなわないこともあるでしょう。その場合は、ご家族、ご友人とともに大学の教職員もぜひ頼りになさってください。昨年開催された東京オリンピックで活躍したある選手の言葉にとても印象的な一節がありました。女子ソフトボールの決勝戦で神がかったダブルプレーを演じた渥美万奈選手のものなのですが、選手として活躍されずっと一人の力で何とかなると考えていた方が初めてプレーの上で大きな壁にあたったとき、ある先輩に頭を下げて基礎からアドバイスをしてもらい、その壁を乗り越えることができたということを述べられたところです。「今までずっと自分で解決してきたから、今回もできる」と思っていたけど、本当の壁にぶちあたったときに、どうしようもなくなって変わるしかなかった。周りの人に頼るしかなかった、その結果精神的に一皮むけたと渥美選手は大よそ述懐されています。日本代表のレギュラーになるような選手でさえも独力で乗り越えられない壁に出くわすのですから、我々凡人においては当然ありえることでしょう。どうぞみなさんもこれからの学生生活で、そして人生で、努力を続けても乗り越えられないような強大な壁に出くわした場合はためらわずに人に頼ってください。それは決して恥ずかしいことではなく、かえって自分を変え成長させる良い機会だと思います。

さて、青春ということばがある通り、若い時期は春という季節に良く喩えられます。そして、みなさんが新しいスタートを切ることになるのも今ここ春という季節です。この春という季節を称えたとても印象的な詩をみなさんにお贈りし、学長としての式辞を結びたいと思います。

一九五一年生まれの詩人高階杞一の詩集『春ing』（思潮社）から「人生が1時間だとしたら」という詩です。

人生が1時間だとしたら
春は15分
その間に
正しい箸の持ち方と
自転車の乗り方を覚え
世界中の町の名前と河の名前を覚え
さらに
たくさんの規律や言葉やお別れの仕方を覚え
それから
覚えたての自転車に乗って
どこか遠くの町で
恋をして
ふられて泣くんだ

人生が1時間だとしたら
残りの45分
きっとその
春の楽しかった思い出だけで生きられる

これからの学生生活には嬉しいことも悲しいことも心踊ることも心沈むこともいろいろあるでしょう。しかしながら、その総体がよき記憶として残る充実したものであってほしいと思います。そして、人生が1時間だとしたら、これからの学生生活は数分のことでしょう。しかしながら、残りの時間をその数分の思い出が支えることになるように、本学での生活が豊かで実りあるものになることを心から願っています。

二〇二二年四月四日

成蹊大学長　森　雄一